

学校教育コンセプト（素案）

フロンティア・ラーニング

未知に挑み、地域とともに未来を開拓する

令和8年3月19日

株式会社イツノマ

1 開拓の町・川南から始まる教育

川南町の歴史は、「**開拓**」の歴史から始まります。現在の川南町は、戦後に全国各地から人々が移り住み、荒れ地を切り拓きながら農地をつくり、暮らしを築いてきた町です。しかし、この地の開発は戦後から突然始まったものではありません。江戸時代にはすでに秋月藩による開発が進められ、水路の整備や農地の拡大が行われていました。水の乏しい高台の土地に農業を成立させるため、人々は知恵を出し合いながら土地を耕し、地域を築いてきたのです。

戦後になると、海外からの引き揚げ者や各地からの入植者がこの地に移り住みました。農業の経験がない人も多く、生活の基盤を築くことは決して容易ではありませんでした。鍬一本で土地を開墾し、作物を育てながら暮らしを支え、試行錯誤を重ねながら地域をつくってきました。そこには、困難な状況の中でも前に進み続ける強い意志と行動力がありました。

川南町のもう一つの特徴は、**多様な地域から人が集まってできた町（合衆国）**であることです。開拓期には全国各地から人々が移り住み、異なる文化や価値観を持つ人々が協力しながら地域社会を築いてきました。お互いに、他者を尊重し、助け合いながら生活を築いてきた経験は、川南の地域文化の土台となっています。

このような歴史の中で育まれてきたのが「**開拓者精神**」です。

開拓とは単に土地を開くことではありません。困難な状況の中でも**新しい道を切り拓き、未来をつくっていく**姿勢そのものです。

川南町の新しい中学校は、この**開拓者精神を教育の出発点**とします。先人たちが未知の状況に挑み、他者を尊重、仲間と協力しながら地域を築いてきたように、子どもたちも、自ら問いを立て自己決定、他者を尊重しながら、未来を切り拓いていく行動力を身につけていくことが求められています。

川南の教育は、「開拓者精神」を受け継ぎ、**地域とともに未来を開拓する学び**を実現していきます。

2 これからの時代に求められる力

AIやデジタル技術の急速な発展、人口減少、産業構造の変化などにより、社会や働き方は大きく変化しています。これまでの社会では、知識を多く持ち、正確に処理する能力が重視されてきました。しかし、AIやデジタル技術が発達する現代では、単純な情報処理や定型業務の多くが自動化され、人間に求められる能力も大きく変化しています。

世界経済フォーラムが発表している「Future of Jobs Report」では、これからの社会で重要になるスキルとして、**クリエイティブ思考、分析的思考、好奇心**、レジリエンス（回復力）や柔軟性、リーダーシップと社会的影響力などが挙げられています。これらに共通しているのは、単なる知識ではなく、**状況に応じて考え、行動し、他者と協働しながら課題を解決していく力**であるという点です。

また、日本ではAIの活用という面でも課題が見られます。総務省の情報通信白書によると、生成AIを個人で利用している割合は日本では約26%にとどまり、中国（81.2%）やアメリカ（68.8%）と比べて低い水準にあります。**デジタル技術を活用しながら創造的に課題解決に取り組む力**を育てることは、これからの社会において重要な教育課題となっています。

さらに、日本では人口減少による労働力不足も深刻な問題となっています。研究機関の推計では、**2040年には約1100万人分の労働力が不足**するとされています。農業の担い手の減少、物流の人材不足、空き家の増加、介護人材の不足など、社会のさまざまな分野で課題が生じると予測されています。

このような社会の中では、正解を覚えるだけの力ではなく、未知の課題に挑戦し、新しい価値を生み出していく力が求められます。創造性や探究心を持ち、失敗を恐れず挑戦するチャレンジ精神、そして多様な人々と協働しながら課題を解決する力が重要になります。

3 基本方針の具現化

令和7年5月に川南町教育委員会が策定した、「川南町立中学校の統合に係る基本方針」では目指す学校像と、目指す生徒像を下記の通り記しています。

【目指す学校像】

1. 川南町の豊かな地域資源を活かし、地域社会と連携しながら未来を創造する生徒を育む学校
2. 生徒一人一人の個性と才能を尊重し、誰もが行きたくなるような魅力のある学校

【目指す生徒像】

1. 自分の個性や強みを理解し、主体的に行動できる生徒
2. 他者の意見を尊重し、協力しながら課題解決に取り組むことができる生徒
3. 変化の激しい社会を生き抜くための創造性と探究心をもつ生徒
4. ふるさと川南への愛着と誇りをもち、主体的に地域課題の解決を図ろうとする生徒

この基本方針の内容をベースに、川南町の小中学校に通う子どもたちの保護者とワークショップを3回開催、親が思う「子どもに伸ばしてほしい力」について話し合いました。



参加者の中で、共通して多くの意見が集まったのが次の三つの力「行動力」「自己決定力」「他者尊重」です。



3 フロンティア・ラーニング

川南町の新しい中学校では、これからの社会に求められる力を育てる教育モデルとして、「**フロンティア・ラーニング**」を学校教育コンセプトとします。

フロンティアという言葉には、二つの意味があります。

一つは、まだ答えが決まっていない**未知の領域に挑戦**すること。

もう一つは、**自らの力で新しい道を切り拓いていくこと**です。

川南の歴史は、まさにこのフロンティアの精神によって築かれてきました。

また、**ラーニング**という言葉には、一つの正解を全員一斉、効率的に追求する「勉強」という意味合いより、**正解のない問いに対してみんながフラットに探究していく「学び」**の意味合いを強く持たせたいという思いをこめました。

「フロンティア・ラーニング」とは、不確かな未知に挑み、地域とともに、自らの力で未来を切り拓く学びです。

この学びでは、次の三つの力を育てます。

第一に、未知の課題に挑戦する**行動力**です。

正解のない課題に向き合い、自ら問いを立て、試行錯誤を重ねながら学ぶ姿勢を育てます。

第二に、自分の未来を主体的に選び取る**自己決定力**です。

自分の興味や関心をもとに学びを深め、進路や生き方を主体的に考える力を育てます。

第三に、多様な人々と協働しながら社会と関わる**他者尊重**です。

地域の人々と関わりながら学ぶことで、多様な価値観を理解し、協力して課題解決に取り組む力を育てます。

「フロンティア・ラーニング」は、地域の自然、産業、文化、人々との関わりを学びの資源としながら、子どもたちが自ら行動し、考え、未来を切り拓いていく力を育てる教育です。

4 フロンティア・ラーニングの具体像

川南町らしい教育を実現するため、新中学校では「総合的な学習の時間＝フロンティアタイム」を教育の特徴として位置づけます。

教科学習は全国共通の内容が多い一方、総合学習は地域の特色を活かした教育を実現しやすい分野です。川南町では、地域資源を活かした探究型の総合学習を展開します。

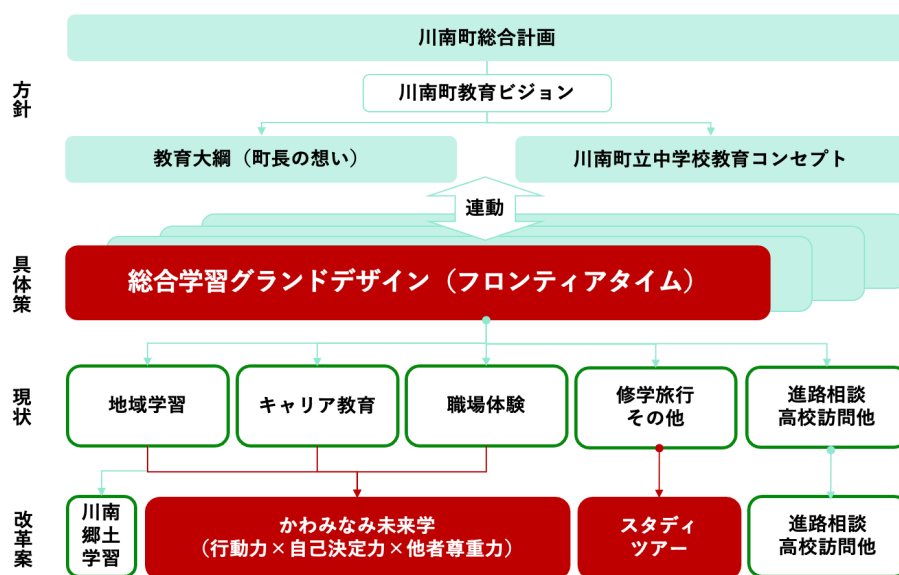
このカリキュラムは、町民ワークショップで出された「子どもたちに身につけてほしい力」をもとに構想されています。

行動力を育てる学びとして、軽トラ市に出店者として参加したり、地域活動の企画を実際に行い実現させる体験が考えられています。地域の現場に関わりながら行動することで、社会とのつながりを実感しながら学ぶことができます。

自己決定力を育てる学びとしては、自分が話を聞きたい地域の人を自分で選び、インタビューを行う活動や、学校外での活動テーマを自分で決める学びが考えられています。例えば、修学旅行では行き先や行程の一部を自分たちで考えるなど、自分で選択し決断する経験を重ねることで、自分の未来を主体的に考える力を育てていきます。

他者尊重を育てる学びとして、地域の高齢者や外国人住民との交流、ボランティア活動など、世代や文化を超えた関わりを経験し、他者を尊重する姿勢を身につけていきます。

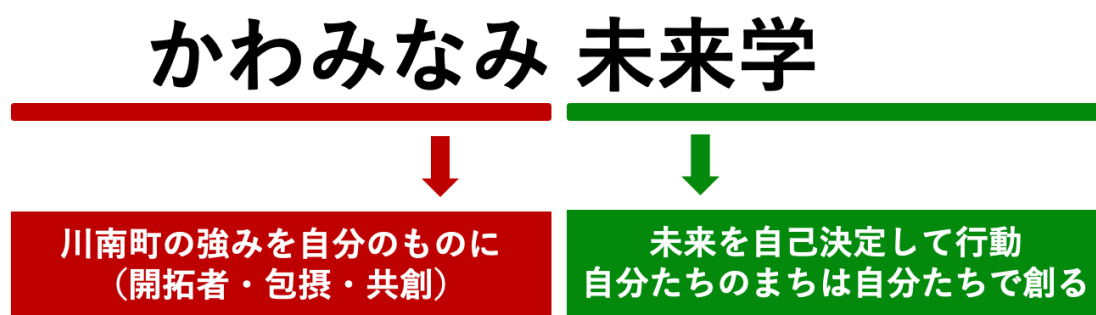
このようにフロンティアタイムでは、地域学習、職場体験、キャリア教育、修学旅行などを探究的な学びとして結びつけながら、生徒が主体的に学びを進めていきます。



かわみなみ未来学

「フロンティア・ラーニング」を具体的に実践するカリキュラムの核となるのが地域探究プログラム「**かわみなみ未来学**」です。川南町の歴史や地域資源、産業や文化などを学びの題材としながら、生徒が地域社会と関わり、**未来のまちづくりを考える探究型の学習プログラム**です。

「かわみなみ未来学」の目的は、川南町の開拓者精神を受け継ぎながら、子どもたちが未来を自ら考え、行動する力を育むことにあります。具体的には、**開拓者精神、包摂、共創**といった地域の価値観を学びの土台とし、**行動力、自己決定力、探究力**を育てることを目標としています。生徒はリアルな体験や地域の人々との交流を通して、地域の魅力や課題を理解し、未来の社会を主体的に考える姿勢を身につけていきます。



リアルな体験を通して、身につけてほしいこと

- ①マインド 開拓者精神・包摂・共創
- ②スキル 行動力・自己決定力・他者尊重力

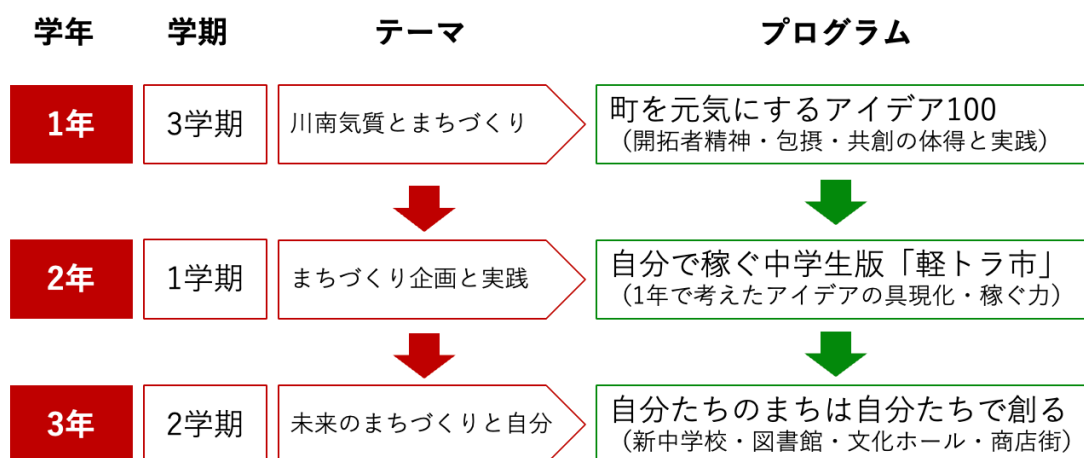
カリキュラムは、学年ごとに段階的に学びを深めていく構成となっています。

1年生では、川南町の歴史や産業、文化などを学びながら、地域の魅力や課題について考え、「**町を元気にするアイデア**」を考える活動に取り組みます。チームで議論しながら理想のアイデアを数多く出し、地域の人々の視点に立って課題解決を考える経験を通して、探究の基礎を学びます。

2年生では、アイデアを具体的な活動として**自ら稼ぐ体験**に発展します。例えば、地域の商店街や事業者と連携しながら企画を立て、実際に商品やイベントを企画・運営するなど、社

会と関わる実践的な活動に取り組みます。予算やマーケティング、販売などを体験することで、地域経済や仕事について理解を深め、自ら考え行動する力を育てていきます。

3年生では、「**自分たちのまちは自分たちで創る**」という視点から、未来の川南のまちづくりをテーマに探究を行います。図書館、文化ホール、総合運動場、商店街など、地域の施設や関係者にインタビューを行い、地域の課題や可能性について理解を深めます。その上で、未来のまちづくりの企画を考え、プレゼンテーションとして発表します。町長や教育長、地域の関係者などに向けて提案を行うことで、自分たちの考えを社会に発信する経験を積みま



「かわみなみ未来学」では、地域を知り、地域に貢献することを考え、実践するとともに、**調査、インタビュー、企画力、デザイン力、プレゼンテーション力、リーダーシップ**など、実社会で役にたつ実務スキルの習得も目指していきます。こうした経験を通して、生徒は地域社会とつながりながら、自分自身の役割や可能性について考えるようになります。

5 地域とともに創る学校

ー 地域施設を学びのフィールドに ー

川南町の新しい中学校は、学校の中だけで学びが完結する場所ではなく、地域社会とつながりながら学びを広げていく学校を目指します。

「フロンティア・ラーニング」では、地域の人々や施設、産業、文化などを学びの資源として活用し、**地域全体を学びのフィールド**として捉えます。

地域の教育やまちづくりに知見を持つ10名の方に「キーマンインタビュー」を実施しました。地域の人からは以下のような意見、アイデアを頂きました。

1. 地域の方を組織化して無料塾を開講
2. AI時代だからこそ「面白がる力」を高めるカリキュラム
3. 開拓者精神＝未来をどう生きるか？
4. $1+1=2$ で終わらせない教育

また、前述のワークショップでは小中学生の子供をもつ保護者の方々からは、これからの教育や学校について、以下のような意見、アイデアを頂きました。

1. トイレ・スクールバスの充実を
2. 自分で選んで決めて行動を起こせる教育カリキュラムを
3. 失敗を恐れず、楽しいを一番におく
4. 図書館・文化ホール・運動場を気軽に使えるように

新中学校の周辺には、川南町立図書館、文化ホール、総合運動場などの公共施設が集積しており、文化・学習・スポーツの拠点が身近にある環境が整っています。また、町の中心部には商店街が広がり、地域の産業や人々の暮らしが感じられる場所となっています。こうした環境を生かし、学校と地域施設をつなぐことで、**地域参画型の学び**を実現します。

川南町立図書館は、**探究学習のための知識拠点**として活用されます。ワークショップでは、「こわくなくて楽しい場所」「気軽に行ける場所」という声が多く挙がりました。例えば、カフェのように気軽に過ごせる空間や、動画撮影や表現活動ができるスペースなど、中学生が自分らしく過ごせる場所としての活用が期待されています。また、地域の歴史資料や郷土資料を通して、川南の歴史や文化を学ぶ場としても重要な役割を担います。



文化ホールは、**地域文化と表現活動の拠点**として活用されます。ワークショップでは、「気軽に使える場所にしてほしい」「eスポーツ大会やイベントの会場として活用できるとよい」といった意見が出されました。音響や照明などの設備を活用しながら、生徒が発表やイベントを企画する活動を通して、表現力や企画力を育てていきます。探究活動の成果発表の場としても重要な役割を果たします。



総合運動場は、**スポーツや交流活動の拠点**として活用されます。ワークショップでは、「予約や団体利用だけではなく、誰でも気軽に使える場所にしてほしい」という声がありました。アウトドア体験や防災教育、スポーツ活動などを通して、生徒が地域の人々と交流しながら体験的に学ぶ機会をつくります。例えば、アウトドア活動や防災学習など、学校の授業と地域活動をつなぐ学びの場として活用していきます。



また、商店街は地域の仕事や産業を学ぶ**キャリア教育の場**として活用されます。地域の商店や事業者との交流を通して、仕事の魅力や地域経済について学びます。生徒が商店街のイベントや商品企画などに関わることで、地域社会の一員としての意識を育てることもつながります。

このように、川南町の新しい中学校では、図書館、文化ホール、総合運動場、商店街などの地域資源をつなぎながら、**学校と地域が一体となった学び**を実現します。地域の中で学び、地域とともに未来を考える経験を通して、生徒は自分の役割や可能性を見つけていきます。

地域とともに学び、地域とともに未来を創る。川南町の新しい中学校は、地域社会とともに子どもたちを育てる学校を目指します。

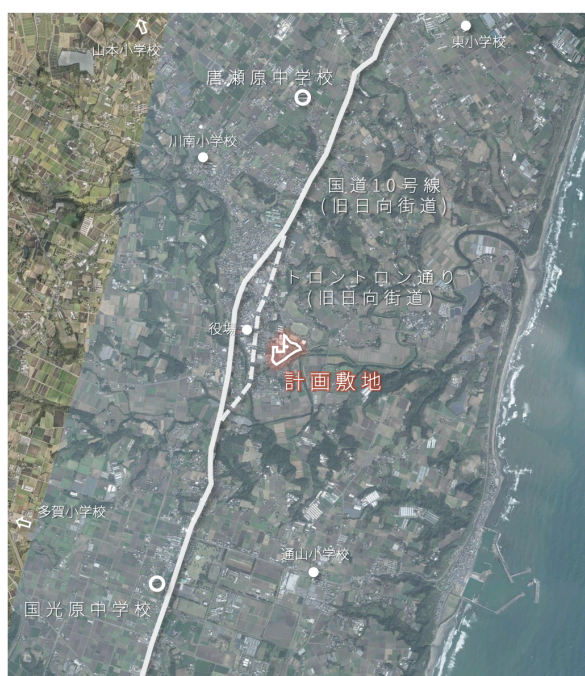
6 まちにひらかれた学びの舞台

ー フロンティア・ラーニングを支える施設計画 ー

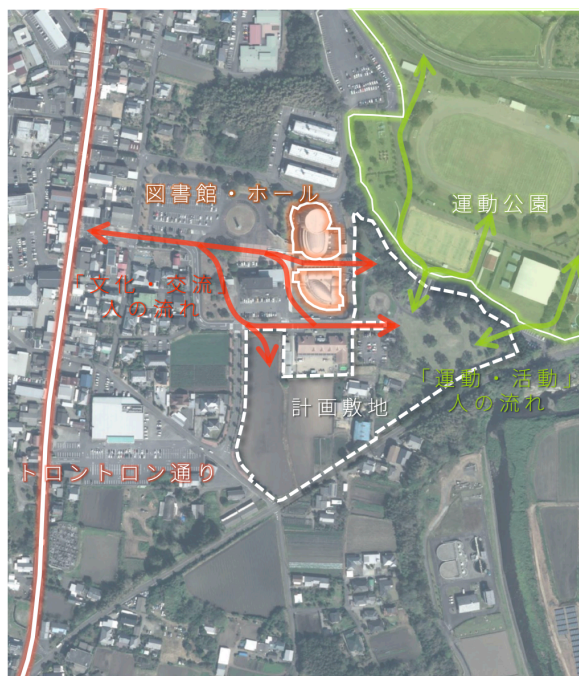
(1) 学校は「まちの真ん中の学びの拠点」となる

本施設計画は、川南町の2つの中学校（唐瀬原中学校・国光原中学校）を統合し、町の中心に新たな学びの拠点を整備するものです。単なる学校の建て替えではなく、「地域とともに未来を開拓する中学校」という教育コンセプトを、空間として具現化する計画です。

計画地は町の中央に位置し、2つの中学校の間にあるだけでなく、町全体のバランスの中でも象徴的な場所です。学校単体で完結するのではなく、周辺の公共施設と連携しながら、学びが内外に広がる環境をつくることを前提としています。



▲地理院地図 GSI Maps



▲地理院地図 GSI Maps

(2) 「まち全体が教室になる」学びのネットワーク

本計画の最大の特徴は、図書館・文化ホール・総合運動公園などの公共施設を、学校機能の一部として位置づけていこうとする点にあります。

計画地は、これらの施設に近接しており、日常的に往来しながら学びを展開できる環境にあります。そのため新中学校では、校舎内にすべての機能を持たせるのではなく、地域の施設と役割を分担することで、中学生により豊かな学習環境を提供します。

また、地域の施設も活用することで、校舎の総面積を合理的に削減し、事業遂行上、最大の懸案となっている工事費削減への貢献にもつなげられるものと考えています。

例えば、

- **図書館**は調べ学習・自習・発表、不登校支援、進路相談の場として機能し
- **文化ホール**は発表・表現・創造、部活動活性化の場となり
- **総合運動公園**は多様な運動活動や部活動活性化の場となります

これにより、生徒は「教室→校内→地域」と学びのフィールドを自然に広げていくことができ、フロンティア・ラーニングにおける「**地域とともに学ぶ**」を体現します。

このように、多様な人の流れが交わる場所に学校を配置することで、生徒は日常的に「社会と接点を持つ環境」の中で学ぶことになります。

つまりこの学校は、単なる教育施設ではなく、「まちの活動と交差する学びのハブ」となります。

① 地域とともにある学校づくり

この計画の核は、学校を「まちにひらく」ことです。

そのために、南北を貫く「学びの軸」を中心に、交流・協働機能を配置し、図書館・文化ホール・運動公園と日常的に行き来できる構造をつくります。

これにより、学校は単体施設ではなく、地域全体と連続した学びのネットワークとして機能します。

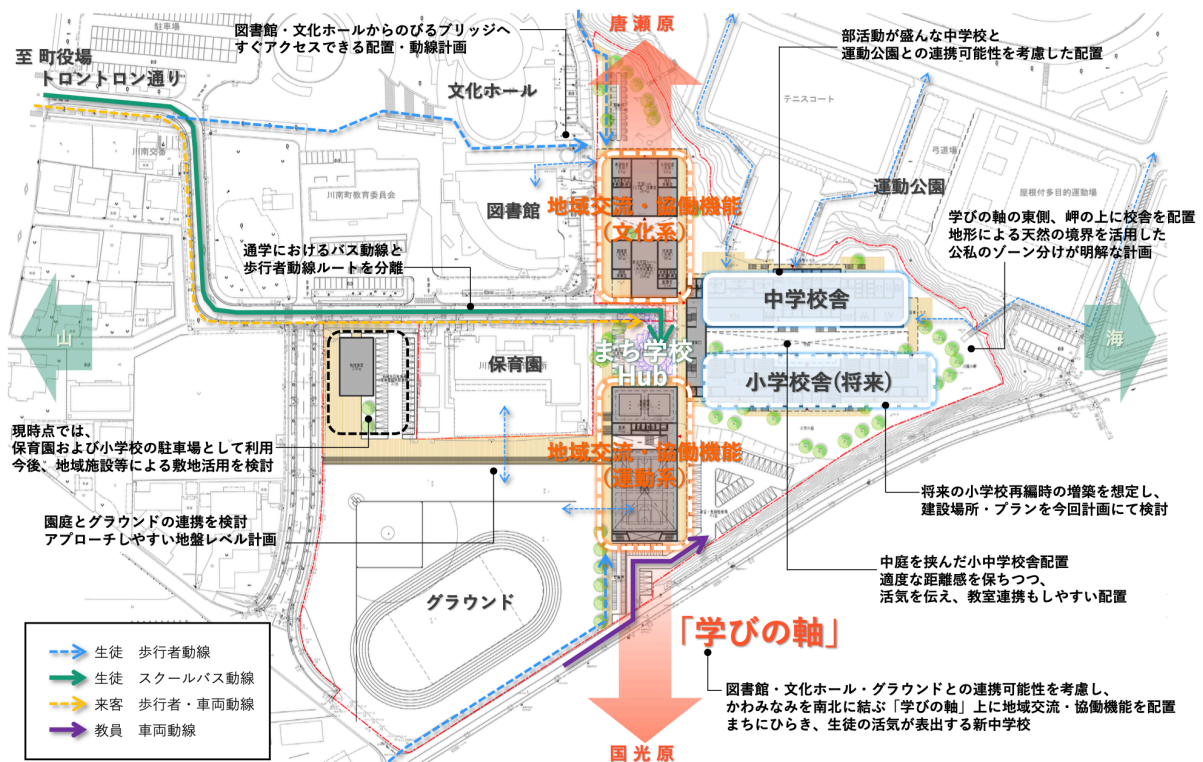
また、岬という地形特性を活かし、

- 地域に開くエリア
- 学校専用エリア

を明確にゾーニングすることで、開放性と安全性を両立させます。

👉 要するに

「まちに開くが、運営は崩さない」設計です。



② 活力ある学校環境づくり

次に重視されるのが、「人が混ざる構造」です。

教室はクラス単位で閉じず、

- HB (生活拠点)
- 教科教室
- オープンスペース

を近接配置し、学年全体がゆるやかにつながる構成とします。

さらに、

- 少人数の居場所
- 偶発的な交流が生まれる動線
- 外部空間（テラス・中庭）

を組み合わせることで、日常的に出会いが生まれる環境をつくります。

一方で、分散した学びを束ねるために、

- 発表・集会の場
- 公共施設との連携

を通じて「集まる場」も意図的に設計します。

③ 誰もが安心して過ごせる環境

すべての生徒にとっての「居場所」を保証する設計。

- バリアフリー・ユニバーサルデザイン
- 明快な動線と視認性
- プライバシーと交流のバランス

に加え、

- 校内支援センター
- カウンセリング室
- 図書館など校外の居場所

を重ねることで、逃げ場を複数持てる学校を実現します。

さらに、

自然光・通風・環境配慮を取り入れ、
心身のコンディションを支える空間とする。

④ 学力向上を支える学習環境

学びの質を高めるために、「教科中心の空間構造」を採用。

- 教科教室
- 教科Lab（探究・展示・滞在）

- 教科準備室

を一体化し、教科ごとの学びを蓄積・深化させます。

また、

- 一斉授業
- グループ学習
- 個別学習

に柔軟に対応できる可変的な空間とし、生徒が自分に合った学び方を選択できる環境を整えます。

⑤ 多様化する社会に対応する学び

最後に、この学校の学びは「外に出る前提」で設計されている。

- 地域資源を活かした探究学習
- 図書館・地域人材との連携
- ICT活用による情報活用力

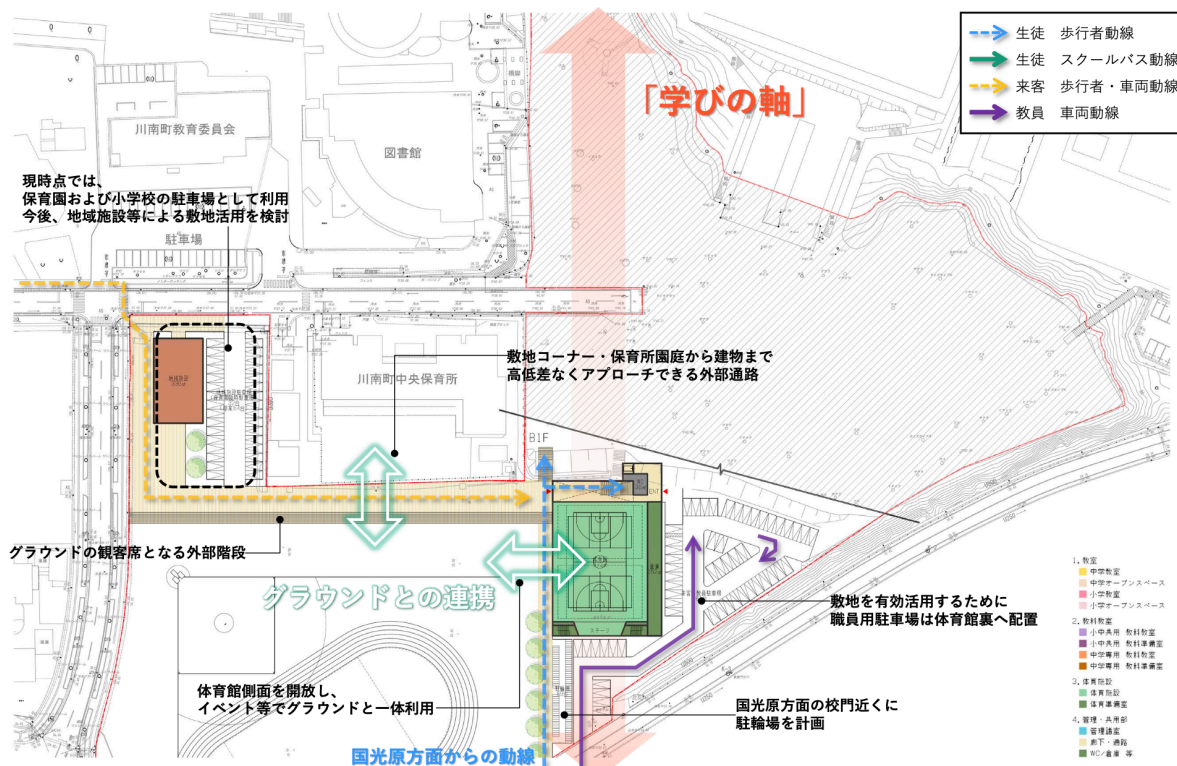
を通じて、

👉 調べる → 対話する → 試す → 発信する

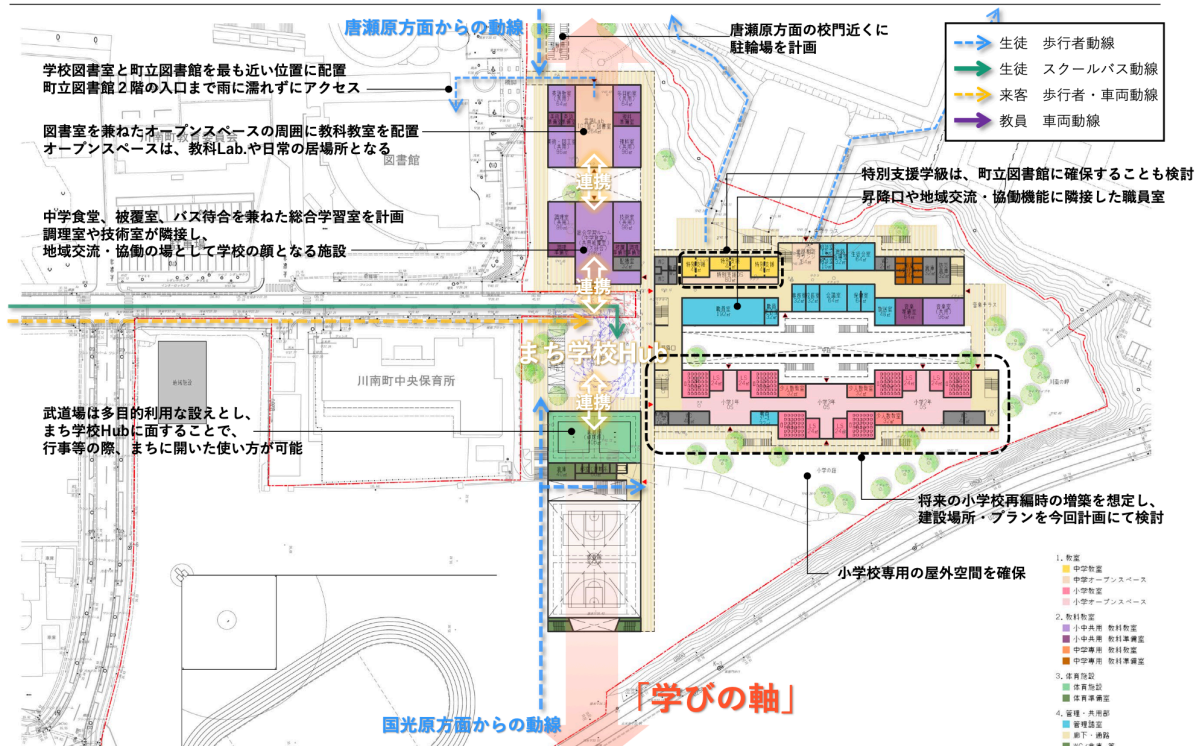
という探究サイクルを日常化します。

また、インクルーシブ教育の視点から、すべての生徒が共に学べる環境を整備します。

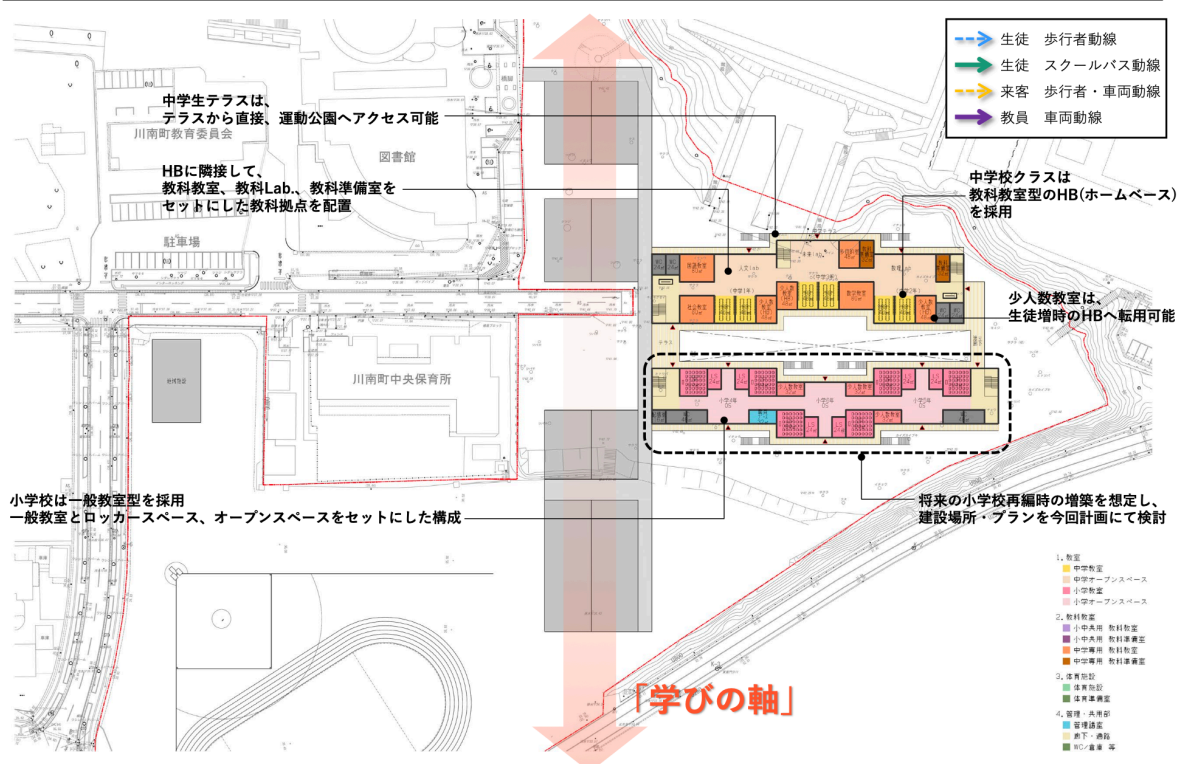
グラウンドレベル(地下1階) 平面計画



1階 平面計画



2階 平面計画



7 まとめ

本施設計画は、単なる学校建築の整備ではありません。これまで示してきた「フロンティア・ラーニング」という教育コンセプトを、空間として実現するための基盤です。

未知に挑み、地域とともに未来を開拓する学びは、教室の中だけでは成立しません。人と出会い、まちに出て、試し、失敗し、また考える。そうした往還の中でこそ、行動力・自己決定力・他者尊重といった力は育まれていくのだと思います。

そのために本計画では、学校を「閉じた施設」としてつくるのではなく、まちと接続し、学びが広がり続ける構造として設計していく必要があります。

図書館、文化ホール、運動公園、商店街といった地域資源と連携しながら、生徒が日常的に社会と関わる環境をつくることで、学びは教室の外へと自然に広がっていきます。

また、校舎内においても、学び方や居場所を自ら選択できる空間構成とすることで、生徒一人ひとりが主体的に学びに向き合う環境を整えていくことが求められます。

これは、知識を与える教育から、自ら学びをつくる教育への転換とも言えます。

つまり、この学校は「完成された場」ではなく、生徒が関わり、地域とともに変化し続けることで、学びそのものが更新されていく「未完成の場」です。

開拓とは、すでにある道を進むことではなく、自ら道をつくること。

新しい中学校は、その一步を踏み出す場として、地域とともに未来を切り拓いていきます。

(補足) 今後の検討課題

- 令和20年度に予定される新小学校統合整備計画を、現段階から見据え、新中学校整備計画の中に将来的な接続や共用の考え方を盛り込んでおく必要があります。
- また、新小学校校舎の建設工事は、新中学校を使用しながら行うことが想定されるため、施工方法、工事車両動線、仮設動線、安全確保のあり方など、工事仮設計画を早期に具体化し、更なる計画の深度化を図る必要があります。
- 図書館、文化ホール、運動公園等の周辺公共施設について、学校活動での日常利用を想定した運用ルール（利用時間、予約方法、管理責任、一般利用との調整等）を具体化する必要があります。
- 将来的な小中共用や教科教室型運営を見据え、HB・教科教室・OS・少人数教室の使い分け、諸室共用の範囲、教員配置や時間割運用等について、運営面からも検証を深める必要がある。
- 本検討では、既往検討の条件の範囲で計画の方向性を整理しており、建築基準法等に関する詳細な法規チェックは行っていません。今後は、配置計画、避難計画、用途・防火区画、バリアフリー、地域開放時の運用条件等も含め、計画の成立性を法規面から詳細に検証する必要があります。